

中国語と日本語の呼称の異同

——対人関係の中日間の異同との関連において——

周 莉

目次

はじめに

1. 人称代名詞

1. 1 一人称代名詞

1. 2 二人称代名詞

2. 呼びかけ

2. 1 職場での「呼びかけ」

2. 1. 1 学校での「呼びかけ」

2. 1. 2 会社での「呼びかけ」

2. 1. 3 身分用語の「呼びかけ」

2. 2 親族の「呼びかけ」

3. 呼び捨てについて

むすび

はじめに

人と人のコミュニケーションは呼称から始まる。呼称には社会的な要素やコミュニケーションの潤滑油としての役割があり、人間関係の調和を図っていくために非常に大切な要素である。特に中国語の場合、日本語にみられる敬語がないので、呼称は、待遇を表現する際もっとも重要な役割

を果たしていると言ってよい。呼称にはそれぞれの国や言語に固有の形式があり、場所や人間関係による微妙な使い分けがある。このことは、通常、中国人、あるいは日本人同士だけでのコミュニケーションでは観察しにくい。が、異文化を持った人たちが接触するコミュニケーションでは、お互いに相手の呼び方、呼ばれた方で戸惑いや違和感を持つ場合がしばしばある。たとえば、中国人が日本語を習う時に苦労するのは呼称を含めた敬語だと言われている。しかし、いかなる社会でも、地位の上下、親疎、男女の違いなどがあり、それが当然言語表現にも反映している。中国語とて例外ではない。中日両国はそれぞれ言語社会構造が違っているから、呼称の違いがあるのも当然であろう。

本稿は、中国語の呼称を日本語の呼称と対照しながら、両国の呼称の共通点と相違点を見出し、中国人の日本語学習者が適切に敬語を使いこなせる能力を高めることを目的にしたいと考えている。

ただし中国語と日本語における呼称を、すべての面にわたって比較対照することは、限られた紙数ではとてもできない。そこで人称代名詞、呼びかけと呼び捨てを中心として両国の呼称の問題を考えていきたい。

1. 人称代名詞

まず話し手が自分自身を何と呼び、聞き手である相手をどう呼ぶかから考えてみよう。中国語の場合はきわめて簡単で、話し手の自分と呼ぶ時に一人称の「我」を、聞き手の相手と呼ぶ時に二人称の「你」「您」を用いる。ここには男女の差も、親疎の差もない。二人称の場合上下の差があるが、使い分けは非常に簡単である。

これに対し日本語では、一人称には「わたくし」、「わたし」、「ぼく」、「おれ」、「あたし」（「こちら」、「こっち」、「余」、「小生」、「わし」、「てまえ」、「我が輩」、「おいら」）があり、二人称には「あなた」、「あんた」、「きみ」、「おまえ」（「貴下」、「大兄」、「貴兄」、「貴君」、「貴様」、

「お宅」、「てめえ」) などがある。もっとも括弧内に入れたものは一般性に欠け、特定の人か、特定の文脈でしか使わないようであるが、一般性があるように見える括弧外のものでも、その用法はきわめて制限されている。すなわち、男性の成人は上記のすべてを使えるし、多少なりとも使う必要が生じると考えられるが、女性になると、「わたし・わたくし・わたしたち・あんた・あなた・彼・彼女」くらいしか使えない。例えば、社長に若手社員が話す場合は、一人称の「おれ・ぼく」を始め、対称のいっさいの使用が封じられる。代名詞があっても多くの場合は使えないのである。もちろん中国語でも旧式の人称代名詞に一人称の「余・吾・臣・不才」、二人称の「汝・尔」などがあったが、本稿では主に現代中国語の人称代名詞を中心として比較対照したい。

以下は、中国語と日本語の一人称、二人称代名詞について、比較してみる。

1. 1 一人称代名詞

まず人とコミュニケーションをする時に自分のことをどう呼ぶかを考えてみよう。中国語の場合は、原則として一人称代名詞である「我」ひとつで足りる。

これに対し日本語では、「わたくし」「わたし」「ぼく」「おれ」「あたし」などがあって、地位の上下、親疎、男女、さらにあらたまった場面とくだけた場面などの違いがあって、使い分けがなされる。例えば

- (1) わたくしもその本を読みました。
- (2) わたしもその本を読みました。
- (3) ぼくもその本を読みました。
- (4) おれもその本を読んだ。
- (5) あたしもその本を読んだ。

のように、いくつもの言い方がある。上の例を中国語で言うと、

(6) 我也看了那本书。

となり、一つの言い方しかない。

それはともかく日本語における一人称代名詞の複雑さに対して、中国語では国家主席であれ、一般庶民であれ、男であれ女であれ、一般的には「我」ひとつですむ。「本人也看了那本书。」といった「本人」を使う言い方もあるが、これは、特定の文脈でしか使われない。

このことは、中国社会における人間関係がまったく平等無差別であることを示すものではもちろんない。しかし、一人称代名詞の使用に関する限りでは、話し手と聞き手との間では対等な地位が保たれているわけである。

また日本語では一人称代名詞を使わずに、自分の称号、親族用語などで自己を表現することがある。

(7) a. さあ、先生の言うことをよく聞いて。

b. 先生は君たちの年頃には、もっと真剣に勉強したものだ。

(8) a. ママはちょっと出かけるから、留守番してね。

b. 太郎、お父さんの本をどこに置いた？

のように、先生や親族が自分のことを称号、親族用語で呼ぶことが多い。

このような呼び方は中国語にも同様にある。例(7)、(8)を中国語にして言うなら、

(9) a. 好，注意听老师讲话。

b. 老师在你们这么大的时候，学习还要用功些。

(10) a. 妈妈出去一会儿，你自己在家啊。

b. 太郎，你把爸爸的书搁哪儿了？

といった具合である。ただし、以上は中学生までの子供に対する時の自己表現であり、一種の子供用語とも考えられる。このような呼び方は先生や親族の上位の人が子供に用いるのがとくに多い。この点では、両国とも同じだといえる。

1. 2 二人称代名詞

次に二人称代名詞について考えてみよう。呼びかけに使う名詞は次の節で述べることとして、ここでは、叙述文や疑問文の中で主語や目的語として機能する場合について考えてみたい。二人称も中国語では、これまたきわめて単純で、「你」「您」しかない。同格や目下の人には「你」を、目上の人には「您」を、ごく簡単に使い分けている。男女、親疎の要素にも左右されない。例えば「この問題についてどう考えますか」と聞きたければ、中国語では、

(11) a. 你对这个问题怎么看? (同格や目下の人に)

(12) b. 您对这个問題怎么看? (目上の人に)

という。

これに対し日本語では、二人称代名詞として挙げられるのは、「あなた」、「あんた」、「きみ」、「おまえ」などがあって、相手によって使い分けがなされている。しかも、通常、同格または目下の者に対して使われているのであって、目上に向かってこのような言い方をするとずいぶん失礼な言い方ということになる。「この問題についてどう考えますか」を目上の方に言うなら、

(13) 先生はこの問題についてどうお考えですか

のように、目上に対しては相手の地位、称号などで表現しなければならない。あるいは称号に姓をつけて、

(14) 山田先生はこの問題についてどうお考えですか。

と言う。

また聞き手をこのように二人称代名詞ではなく、その名前や称号で呼ぶことは、目上に対してでなくとも、同格や目下の者に対しても、日本語ではよく使われている。

(15) a. (先生が生徒に) 田中君は宿題をやってきたかね。

b. (女子学生は友人に) 芳子さんのノートを貸してくれない,
のごとくである. このようにして, 日本語で聞き手を指す場合, 二人称代
名詞は同格または目下に対してしか使えないという制限があるのに, 名前
や称号でなら, 誰にでも使えるという特色がある. 中国語はそれと全く
違って, もし先生が「田中作业作完了吗?」のように名前や称号で呼ぶと
すれば, 田中君が聞き手の生徒のことでなく, 三人称の第三者表現にな
る. (13)(14)(15)bの例も同じである.

また更に次のように, 一人称代名詞で, 聞き手を指すことすらある.

(16) お母さんに**ぼく**のお手を見せてちょうだい.

これは成人の話し手が, 聞き手である幼児の心の中に入って, それと同
化し, 聞き手の立場に立って話す場合に, よく使われる用法である. しか
し, 中国語では, 「我」と「你」を逆に使うようなことはしない.

以上見て来たように, 中国語と日本語との二人称代名詞の使用には, 違い
が著しいことが分かる. 日本語の二人称は, 通常同格または目下の者に対
して使われるのが普通であって, 敬語の場合は二人称代名詞を使うとか
えて失礼となる. 聞き手の相手をはっきりと呼ぶ時にどうするかという
と, 多くの場合は, 姓に「さん」, 「くん」等, 或いは相手の社会地位を
表わす「社長, 部長, 先生」などの役職名をつけて言うのである. 親族の
場合は親族用語で言う. たとえば

(17) 社長は今お帰りになりますか.

(18) お父さんも冬休みにどこかへ旅行に行きますか.

のように, 呼びかけの呼称が二人称として用いられているのである. これ
も (13)(14)(15)の例と同じような呼びかけで, このような言い方は, 中国語
では三人称の第三者表現にとらえられてしまう. 二人称で役職名や親族用
語で呼ぶのなら, (17)(18)例では中国語で言うと次のように言う.

(19) 张总您现在回家吗?

(20) 爸爸您寒假去哪儿旅游吗?

というように必ず二人称代名詞の「您」をつけるのである。

この用法は、中国人日本語学習者にとっては、もっとも難しいところである。一人称なら学習によって何とか習得できるが、二人称の呼びかけは難関である。違和感と戸惑いの多いのもそれである。中国語の場合は聞き手を指す場合、二人称代名詞の「你」「您」がほとんど欠かせないからである。一人称も同様で、はっきり「我」を言わないと話者が誰のことを言っているか分からなくなる。

中国語と日本語との人称代名詞の用い方の違いは、ここで終わったわけではない。更に、日本語では動作主を指す人称代名詞がなくてもコミュニケーションができる特徴がある。一人称も、二人称もなくても会話が続けられるのである。次の会話を見てみよう。（『日本語ジャーナル』2000年6号より）。

(2) (学生交流会で留学生と日本人学生との会話)

A：リサさん、今、大学で何を勉強しているんですか。

B：専門ですか。わたしの専門は日本文学です。

A：日本文学？

B：ええ、イギリスの大学でも、ずっと日本語と日本文学の勉強をしていたんですが、それは主に日本文学をいろいろ読んで勉強しました。今は大学院の文学研究科、英文学と日本文学を比較して研究しています。

A：そうなんですか。じゃ、ずいぶん長く日本文学を研究しているんですね。わたしより、日本文学を読んでいるかもしれませんね。

B：そんなことはないですよ。

A：で、今までにどんな作品を読んだんですか？

B：そうですね。夏目漱石なら、ほとんど読みました。田中さん

は、夏目漱石の中で、何が好きですか？

人称代名詞は一ヶ所しか出なかった。それを省いても、会話の進行には、何ら差し支えないようだ。以上のような人称代名詞のない会話は、中国語ではとても考えられない。人称代名詞の「我」「你」がないと会話が進まなくなるのである。(21)の会話を中国語で言うと次のようになる。

(22) A：丽莎，你现在在在大学学什么？

B：你指的是我的专业吗？我的专业是日本文学。

A：日本文学？

B：是的。我在英国的大学一直学的是日语和日本文学，主要是通过阅读大量的日本文学作品学习的。我现在在大学院的文学研究科从事英文学和日本文学的比较研究。

A：是吗？那么就是说，已经从事了很多年的日本文学研究了。可能你比我读的日本文学作品还多吧。

B：没那回事儿。

A：那么，你至今为止都看了那些作品呢？

B：嗯，夏目漱石的几乎全看了。田中，夏目漱石的作品中，你喜欢哪部？

上の例のように、話し手や聞き手の行為に言及した場合、人称代名詞の「我」と「你」がないと、会話が続けられないのである。その反対に、(21)の日本語の会話にそれぞれ(22)の中国語会話のように「わたし」或いは「あなた」を入れると、かえっておかしくなってしまう。日本語はあいまいな言葉と言われているが、その中には、人称代名詞の呼称も中に入るだろう。このような違いがあるから、中国人の日本語学習者が日本語会話する時によく「あなた」を使うのである。「あなた」はイコール「你」と思われたのだろう。会話文だけではなく、手紙文などの文章の場合にも、一人称、二人称を使わない例が挙げる。

(23) ありがとうございます。おかげさまで中国人の方向けにパンフ

レット作成できました。近年中国、韓国の方の北海道観光が増えており、小樽にもかなりの観光客が見えますので、そのうち観光案内書の翻訳も必要になるのではないのでしょうか。折角商品の説明文を作っていただきましたので、もしよろしければお礼にお送りしたいのですが、ご住所教えていただければ幸いです。当社は地元の原料でワインをつくることでスタートした会社で、従ってワインの方が主力商品ではあります。最後に重ねて御礼申し上げます。よい新年をお迎えください。

さて三人称代名詞を省いた会話の例も挙げられる。例えば、次のようなものがある。

(24) (凡人社出版の筑波大学日本語教育研究会著『日本語表現文型 中級Ⅱ』より)

A：ポーラックさん、いますか。

B：いいえ、留守です。用事で東京へ行きました。

A：何時ごろ帰りますか。

B：朝早く出かけたから、夕方に帰るでしょう。

A：じゃあ、また夜来ます。

B：何時に帰るか分かりませんから、来る前に電話をしてきてください。

A：はい。そうします。

上の例を中国語で言うと次のようになる

(25) A：泊拉科在吗？

B：不在。他有事去东京了。

A：他什么时候回来？

B：他早上一大早就出去了，傍晚能回来吧。

A：那么，我晚上再来。

A：他什么时候能回来不知道，来之前你打个电话吧。

B：好吧。那就这么办。

一人称と二人称のように、中国語の場合には三人称代名詞が必要である。

本稿では、三人称を対象外にしたが、ここでは問題として挙げて、これからも検討していきたいと思う。

2. 呼びかけ

以上中国語と日本語の一人称、二人称代名詞について比較対照したが、中国語の人称代名詞は、日本語のものよりもいかに単純であるかがわかる。しかし、呼びかけの呼称になると、どうなるだろうか。

日本社会では相手を呼ぶのにたいいていの場合、姓に敬意を表わす「さん」、「くん」等、或いは、相手の社会地位を表わす「社長、部長、先生」などのような役職名をつけて呼ぶのが習慣である。日本にはこのように暗黙の社会的言語コミュニケーションのルールが存在している。

一方、中国の社会では相手を呼ぶ場合、「老张」、「小李」などのような姓の前に「老」か「小」、或いは相手の社会地位を表わす「张总、王经理、陈校长」などのような役職名をつけて呼ぶのが普通である。更に日本では考えられない呼び捨てで呼ぶ場合も多く見られる。日本ではよほど親しい人でないと呼び捨てで呼ばないが、中国ではごく普通に使っているのである。呼び捨てについては後で具体的に述べるが、まず姓の前につける「老」や「小」について考えてみたい。

中国語の「老」や「小」はよく日本語の「さん」に当たる敬称と思われるが、実は両者には大きな違いがある。日本語の「さん」は敬意を表わすものとして用いられているが、中国語の「老」と「小」は敬意を表わすものではなく、親しみを表わすもので、また年齢や先輩後輩を区別する記号のようなものでもある。「老～」、「小～」によって、いささか年かさを区別するだけで、むしろこれは親しみを込めた言い方である。基本として

は、齡不惑の40歳を過ぎた人には「老～」で、若い人には「小」で呼ぶが、早くから三十いくつで「老」で呼ばれている場合もあるし、40歳、50歳を過ぎても「小～」で呼ばれている場合もある。これは、呼ばれる人本人の精神年齢や見かけの年齢などに関係があるが、先輩、後輩の要素にも左右される。しっかりしていて、しかも老けて見える人は早くから「老」付けで呼ばれるが、40、50を過ぎても先輩から見ると若いから「小」で呼ばれるケースが多い。若い同輩同士は、二、三年の先輩であっても、「老」づけで呼ばれること普通はないのである。「老」、「小」は夫婦の間も使う。若い夫婦はお互い「小～」で、中老年の夫婦は「老」で呼ぶ。日本語の「さん」は性別、年齢、親疎を問わず、かなり広い範囲で使われるが、中国語の「老」と「小」は年齢によって使い分けられている。また相手の苗字が分からない限り使えないのである。日本語の「さん」は相手の苗字を知らなくても、「運転手さん」「車掌さん」のように使うことができる。日本語の「さん」は誰にでも使えるから、非常に便利な言葉である。「老」と「小」の使い分けは、中国人でも戸惑う時がある。

そもそも中国の「～同志」が、日本語の「～さん」に相当すると思われる人もいるだろうが、それも必ずしも妥当ではない。新中国成立後（1949年）、中国では急進的な平等主義が主張され、言語についても平等を標榜した。つまり社会的地位の上下による言語表現の差別を止めて、誰でも平等な話し方をしようというのである。誰にでも「～同志」を使うことになったのである。知らない人に対しては「同志」だけで呼びかけていた。七、八十年代に「同志」というのがまだ尊敬の意が足りないのか、北京を始め、多くのところでは、知らない人に、例えば、道を尋ねる時、「同志，请问北京车站怎么走？」（ちょっとお尋ねしますが、北京駅にはどう行ったらいいでしょう）。店で買い物する時店員に「师傅，我买两支铅笔。」（店員さん，鉛筆を二本ください）というように、また「师傅」という言葉が一時流行ったことがあった。だが、90年代に入ってから、中国

の改革開放が進むようになって、長年扉を閉ざしていた中国が香港や台湾などの地域、また外国にいる華僑と交流を頻繁に行うようになって、長年中国大陸で姿を消していた「先生、女士、小姐」などの呼びかけが、また復帰するようになった。このように、世の移り変わりによって、呼びかけも変わりつつである。

以下は、日本社会と中国社会の呼び方の実態、或いは文化的背景を職場の中、家庭の中の二つに分けて比較してみよう。

2. 1 職場での「呼びかけ」

職場といえば、学校・会社・病院・新聞雑誌社・政府機関・芸能界などいろいろな場合が考えられる。職場によって、呼び方が違うのは日本も中国も同じである。次に代表的なものとして学校・会社を中心に比較してみたい。

2. 1. 1 学校での「呼びかけ」

まず学校の場合をみてみよう。

日本社会では上司は役職名で呼ばれるのが常識なので、小・中・高等学校では、校長は「校長先生」、教頭は「教頭先生」などのように、「先生」という尊敬語と役職名を付けて用いるのが圧倒的に多く、ほぼ90%の教員がその慣例に従っている。大学では学長は「学長」、学部長は「学部長」と呼ばれ、事務部（局）では、部長や課長は「部長」「課長」と呼ばれている。教員のあいだでは、年上の教員は「～先生」と呼ばれるが、同格や年下の教員は「～さん」か「～くん」で呼ばれるのが普通である。事務の方はお互いに「～さん」づけで呼ばれているが、年下の人には「～くん」づけで呼ぶことがある。学生は教師を「先生」「～先生」、事務の方には「～さん」と呼ぶが、教師は学生に対して「～さん」、「～くん」と呼ぶのが普通である。

一方、中国社会でも日本と同じように上司には役職名で呼ぶ習慣がある。校長や学長は「～校長」と呼ばれる。それは中国においては、一つの学校には校長・学長のほかに副学長・副校長という職が設けられているから、区別する必要から姓の後ろに役職名をつけて呼ぶのだと考えたらよいだろう。だがそれだけの理由でもないようだ。役職名で呼ばれるのは、トップに立つ学長・校長クラスぐらいで、それ以外の者は教員なら「～老师（先生の意）」か、または「老～」、「小～」付きと呼ばれ、事務の人なら「老～」、「小～」で呼び合うのが普通である。だが、中国には「老师」も「老」も「小」もつけずに、呼び捨てにされる場合も多く見られる。「老师」、「老」、「小」の使い分けは、年齢差による。若い教師は先輩の教師に「～先生」、先輩の教師は若い教師に「小～」か、呼び捨てで呼ぶ。年配の教師同志の間は「老～」か、呼び捨てであり、若い教師同士の間では、「小～」か、呼び捨てで呼ぶのが慣例である。教師は学生を呼び捨てで呼ぶが、学生は教師を「～老师」と呼ぶ。中国では、学生は教壇に立つ教師はもちろん、大学関係者の他の人についても「～老师」と呼ぶ習慣をもっている。これらの人の肩書きは必ずしもはっきりしているとは限らないから、学生の立場から考えれば、このような場合には、とにかく「老师」で呼んでおいたほうが儀礼上適切だと判断したからであろう。中国人留学生が日本の大学の事務関係者を「～先生」と呼ぶようなことがしばしば起こるのも、この例であるといつてよい。

蘇徳昌氏の論文の「日漢敬語的比較与翻訳」（1981年）の中に次のような記述がある。蘇氏は文化大革命の前に大学院を終え、母校の大学の助手になっていた人である。そこで、蘇氏は自分の先生からは「蘇徳昌」と呼び捨てで呼ばれ、先輩からは「小蘇」、同輩からは「老蘇」、学生からは「蘇老师」と呼ばれていたと書いていたが、通常大学院を出たばかりの若手の教師は「老蘇」と呼ばれることは、まずないので、特殊な例とみてよいであろう。

2. 1. 2 会社での「呼びかけ」

まず両国の会社の中で、部下が上司をどう呼ぶかについて、検討しておこう。

会社の場合でも、日本人は上司に対して「社長、部長、課長」などの役職名で呼ぶのは慣例である。「社長もご一緒にいかがでしょうか」、「部長（課長）もご一緒にいかがでしょうか」部下が社長・部長・課長を誘う時の言葉であるが、直接役職名で呼ぶのである。中国語では、これは、たいていの場合、相手が社長・副社長には、社長であれ副社長であれ、「～总」（「总」は「总经理」＜社長の意＞の略称である）で呼ぶ。だが、部長・課長クラスの人に対しては会社内部ではとくに決まった呼び方はない。それぞれの会社の習慣、それぞれの人の性格の個人差で、役職名をつけて呼ぶか、「老」で呼ぶか、また呼び捨てにするか、さまざまである。しかし、他社の部長や課長には、たいていの場合、その人の役職名で呼ぶのが普通である。それは他社に対して敬意を表わすためである。

上司が部下を呼ぶ場合、日本では、年齢性別を問わずに「～さん」と呼ぶ。年下の人には「～くん」と呼ぶ場合もある。これに対し、中国では、上司は部下に対し「老」、「小」で呼ぶか、呼び捨てにするのが慣例である。たまたま会議のようなあらたまった場合には、上司が役職のある部下に対して役職名で呼ぶ場合もある。部下に仕事上の責任感を持たせたいからであろう。

同格の社員同士の呼び方では、日本の場合にはお互いに「～さん」付けで呼ぶのが普通だが、中国では互いに「老」か「小」、また呼び捨てで呼ぶ。更に親しい間柄になると、姓をつけずに、ファストネームで呼び合うことも数多く見られる。

2. 1. 3 身分用語の「呼びかけ」

以上は、学校と会社を代表的な事例として取り上げ、日本と中国での

「呼びかけ」について比較検討してみたが、両国の社会では、呼びかけは、実に千差万別とも言えるほどの違いがあり、多種多彩である。この場合、目上の人々の地位を表わす身分用語が例として挙げられる。身分用語とは、前の節に挙げた「社長」、「部長」、「課長」、「校長」、「教頭」、「先生」など役職名の類のほかに、「お巡りさん」、「八百屋さん」、「運転手さん」、「魚屋さん」、「看護婦さん」、「車掌さん」などの職業名もある。「先生」は教師にとっては職業名とも言えるが、代議士、弁護士、医師に対して用いられる場合には、身分用語としての性格をもつ。

職業名に「さん」をつける類は、ごく一般の職業をもつ人に用いるに対し、「先生」は社会的地位が高く、人から尊敬されている職業をもっている人に用いるのが普通である。

身分用語は、中国語にもある。「～总」、「～校长」、「～社长」、「～院长」、「～所长」、「～主任」、「～处长」といった役職名の類のほかに、「～老师（学校の先生）」、「～律师（弁護士）」、「～医生（医者）」、「～大夫（医者）」、「～导演（映画などの監督）」、「～教练（スポーツの監督またはコーチ）」などの職業名、或いは、「司机师傅（運転手さん）」、「护士小姐（看護婦さん）」、「警察同志（お巡りさん）」、「售票员师傅（車掌さん）」などの職業名などである。

職業名の前に姓をつける「～老师」などの類は、社会的地位が高く、尊敬されている職業をもつ人に用いられるのが一般的であるのに対し、職業名の後に付けられる「师傅」、「小姐」、「同志」などの言葉は、普通どこでもいる職業人に対して用いられる。そもそも「～师傅」というのは、後輩の労働者が先輩の労働者に対する呼びかけ敬称であり、「小姐」はもともと裕福な家のお嬢さんに対する敬称であったが、今ではサービス業で働く女性に対する敬称としても用いられている。

2. 2 親族間の「呼びかけ」

中日両国での親族間の「呼びかけ」を考察するには、まず「呼びかけ」の親族用語から考えておかねばならないと思う。親族用語は、家族もしくは親族の内部で、それぞれの血縁関係および世代に位置する人々のあいだで使われる言葉で、に与えられる名称で、森岡健二氏の分類では、日本語の場合大きく二種類に分けられる。自称（第一人称）・対称（第二人称）・「呼びかけ」の類と、他称（第三人称）の二種類である。本論文では、主に前者、特に「呼びかけ」について中国語と比較してみたい。

まず範囲を親族内部に限って見よう。これは中国も日本も同様であるが、親族内の地位の上下序列によって「呼びかけ」の表現が異なることに注目しておきたい。すなわち、上位の親族に対しては親族用語で呼びかけ、下位の者に対してはファストネームで呼びかけるのが普通である。例えば、子供が父親に対して呼びかける時には、日本語では「お父様」、「お父さん」、「パパ」などと呼ぶが、中国語では「爸爸」「爸」「老爸」などと呼ぶ。これに対して父親が息子を呼ぶ場合には、日本語では「せがれ」のような親族用語は使わないし、中国語でも「儿子」のような呼びかけをしないのは原則で、「小強」のようなファストネームを使うか、「林林」のような愛称を使う。たまたま中国では、親が子供を「儿子」と呼ぶような、上位の者が下位の者に親族名で呼ぶ場合もあるが、それは相手に特別の情緒的態度を持った時である。子供に対して特別な優しい気持ち、自分が親であるゆえの特別な感情を表わしたい場合は、ファストネームによる通常の呼称ではそれができないので、親族名称を使うのである。日本語の場合は、目上が目下に対して「息子」とか「子供」とかいう呼びかけは、いかなる場合でもしないであろう。また中国語でも、かつては、お兄さんやお姉さんは、家族の多い家族では、弟や妹を「二弟」「小妹」と呼ぶことがあったようだが、現在ではあまり使われなくなっている。

なぜ親族内において、上位者を親族名で呼ぶのか、それは相手の権威或

いは優位を確認するためであろう。具体的に両国の親族名にはどのようなものがあるか、どう違うのかを次にみておこう。まず、両国親族内の上位者の親族用語を以下に挙げておく。

	日 本				
父親に	お父さま	お父さん	父ちゃん	パパ	おやじ
母親に	お母さま	お母さん	母ちゃん	ママ	おふくろ
祖父に	おじいさま	おじいさん	おじいちゃん	じいちゃん	
祖母に	おばあさま	おばあさん	おばあちゃん	ばあちゃん	
おじに	おじさま	おじさん	おじちゃん		
おばに	おばさま	おばさん	おばちゃん		
兄に	お兄さま	お兄さん	兄ちゃん	兄貴	
いとこの兄に	おにいさま	おにいさん	兄ちゃん		
姉に	お姉さま	お姉さん	姉ちゃん		
いとこの姉に	おねえさま	おねえさん	姉ちゃん		
兄嫁に	おねえさま	おねえさん			
姉の夫に	おにいさま	おにいさん			

中国語

父親に	爸爸	爸	老爸
母親に	妈妈	妈	
祖父に	爷爷		
祖母に	奶奶		
母方の祖父に	老爷		
母方の祖母に	姥姥		
おじに	叔叔		
おじの嫁に	婶婶		

おばに	姑妈 (父親のお姉さん)	姑姑 (父親の妹)		
おばの夫に	姑父			
母方のおじに	舅舅	大舅	二舅	
母方のおじの嫁に	舅妈			
母方のおばに	姨妈 (母親のお姉さん)	姨姨 (母親の妹)	大姨	二姨
母方のおばの夫に	姨夫			
兄に	哥哥	大哥	二哥	
義理の兄に	堂哥			
姉に	姐姐	大姐	二姐	
義理の姉に	堂姐			
母方の義理の姉に	表姐			
兄嫁に	嫂	大嫂	二嫂	
姉の夫に	姐夫	大姐夫	二姐夫	

以上の日本と中国の親族名を比較してみると、日本語では一つの親族用語にはいくつかの言い方があるのに対し、中国語では、「爸爸，妈妈」を除いて、一つしかないことがわかるであろう。「爸爸，妈妈」は未成年の子供の呼びかけで、大人になったら「爸，妈」と呼ぶことが多い。「老爸」は親しみを込めた呼び方で、子供の時からそう呼ぶ人もいる。日本語は一つの親族用語にいくつもの呼び方があるのは、その人が生活していることばの環境や家の社会的地位によるのであろう。日本人は皆自分の家の環境や地位に応じて、どの親族名を用いたらよいか選択しているわけである。中国ではこのような区別がない。どの家族も同じような親族用語で「呼びかけ」をしている。国家主席の家族であれ、ごく普通の庶民の家族であれ、みな同じである。

また、日本では、父方の親族も母方の親族も、ともに、おばあさん、おばさんと呼ぶが、中国でははっきり区別されている。古い諺に女性が結婚したら、外に捨てられた水というのがあった。ほかの家の者となり、実家

とは血縁関係がなくなるというわけである。こうしたことから、父親のほうの親族は「内」であり、母親のほうの親族は「外」ということになる。中国の南の多くの地方では、父方のおじいさん、おばあさんのことを「公公、婆婆」というのだが、母方のおじいさん、おばあさんは、「外公、外婆」と呼ばれているのはそのあらわれである。そこで、父方の親族と母方の親族とは、はっきり区別され、これが親族用語でも区別されて用いられているのである。親族の全員がそれぞれ違った親族名を持っているのである。これらの親族名によって、長幼の順序や親族の親疎、内外の関係やそのつながりが一目瞭然となる。

以上考察したことをまとめると、日本語の「呼びかけ」も中国語の「呼びかけ」も、非常に血縁関係や長幼の順序を重視していることが分かる。ただし、日本語の親族の「呼びかけ」は、血縁関係を示すものだけではなく、その家族の生活の環境や社会的地位なども表わしていることが多い。また親族用語には内外親疎を示すような区別はなく、ただ家庭の長幼の順序を示しているだけである。同じ世代なら同じ親族用語をもち、家族全体の存在を重視する。それに対し、中国語の親族の「呼びかけ」は、生活環境や社会地位とは関係なく、ただ同じ家庭の中での一人一人の長幼の順序を示しているほかに、同じ家族の中に内外親疎の区別や、それぞれの人の家族内での役割が示されているように感じられる。中国では、家族の中で、個個人の存在が重視されていると考えたらよからう。

親族の上位の人が下位の人を呼ぶ際、中国でも日本でも名前と呼ぶのが普通であるので、上で挙げた例は、下位の人から上位の人に対する呼び方に限られている。だが、この他、中国語では、上位の人が下位の人のこと言う時第三人称の親族用語を並べて、「弟弟、弟妹（弟の嫁）、妹妹、妹夫（妹の夫）、大姑子（夫の姉さん）、小姑子（夫の妹）、大姨子（妻の姉さん）、小姨子（妻の妹）などということがある。とにかく三等親までの親族に皆違う用語がある。おばさんが何人もいる場合、「大姑、二姑、小

姑」というような区別が設けられている。このことから明らかになるのは、中国人がいかに家族の血縁関係を重視し、一人一人の役割を明白にしているか、ということである。

以上の原因で、仲のいい友達、特に幼な馴染みの友達は、よく「小明哥」「王莉姐」というように、姓などの後に親族用語の「哥、姐」をつけて呼ぶのである。これは、兄弟のように親しい間柄を意味する用語である。また友達のおじいさんやおばあさん、若い人が近所の年長者に対して、「～爷爷、～奶奶」と呼ぶこともあるし、友人のお父さん、お母さんや、両親の同僚、または友人、近所のおじさん、おばさんに向かって、「叔叔、阿姨」「～叔叔、～阿姨」と呼んだりする。「叔叔、阿姨」は、また、子供が見知らぬ人（若い20代も含め）に対したり、若い人が年配の見知らぬ人に向かう際にも用いられる。商売人が男の人に「大哥」、女の人に「大姐」と呼ぶのも親しみを感じさせたいからであろう。このような親族用語は、時々、職場でも耳に入ることがある。日本語でも、友達のおじさん、おばあさんやお父さん、お母さん、また見知らぬ人に親族名で呼ぶことがあるが、友達の間で「兄さん」「姉さん」で呼ぶことはあまりない。職場では絶対あり得ないといってよいだろう。

3. 「呼び捨て」について

中国語の「呼び捨て」の使い方については、上記の記述の中にもあったが、中国語の「呼び捨て」は、上位の者に対する以外ほとんどといってよいくらい使用されている。中国ではテレビやラジオなどのマスコミだけでなく、公の場合でも人を呼び捨てにするという習慣がある。それに対し、日本の場合はよほど親しい間柄でない限り、使われない。

学校では「李小明，你作业作了吗？」中国の先生が生徒にこう聞くが、日本の学校の先生は「田中くんは宿題をやってきたかね。」と尋ねるのが普通である。また中国の会社の課長が社員に向かって、「李小明，给A公司

的电话你打了嗎？」と言うところを、日本の会社では、「田中さんはA会社へ電話をかけたか」と聞く。

会議などの出席をとる場合は、日本は「高橋さん、山田さん…」と呼びながら点呼をとるが、中国の場合は「陈丹、周黎明…」と呼び捨てで呼ぶのが普通である。日本語の場合は必ず「さん」、「くん」を後につけるが、中国の場合は呼び捨てされるが多い。

とくに中国の二文字の姓——「欧阳」「司马」「诸葛」「上官」などの持ち主は、あらたまった場合だけに「先生」、「校長」などの敬称付きで呼ばれるが、それ以外は、ほとんど呼び捨てされている。「老」や「小」をつけられないからである。「老」、「小」をつけると、年齢が老い、若いのを強調しているように感じられる。二人の「欧阳」がいた場合は、「大欧阳」、「小欧阳」というように年齢の上下で区別されるのである。中国の姓で二文字重なっているのは上にあげた幾つかの場合ぐらいで、ほとんどは一文字である。一文字の姓に「老」、「小」をつけるのはよいが、二文字の姓に「老」、「小」をつけるとおかしい感じがする。それには語呂の問題が絡んで来るからであろう。日本人の名前には二文字、三文字が重なること多いから、中国で日本人がよく中国人に呼び捨てにされることが起こる。これはここに原因があるといつてよいだろう。知り合ったばかりの時は敬称の「先生」、「女士」、「小姐」づけで呼ばれるが、親しくなるにつれて、だんだん呼び捨てにされる。これは、日本人にだけではない。ほかの国の人に対してもそうしているのである。中国国内の少数民族の人もよく呼び捨てにされる。少数民族の人の姓が長いからである。このような「呼び捨て」は日本人には初めのうちはどうしても違和感がするという。

また、中国では仲間同士の場合、ファーストネームで呼ぶのが屢屢である。「王春明」という人を「春明」と呼ぶ具合である。仲がよいほどこのような呼び方をして、このほうがむしろ親しみがこもると感じられている。「王明」のようなファーストネームでは一文字を除く。日本語におい

でも、親族内部や子供の間では「太郎」「花子」のように名前で呼ぶことが多いが、成人とくに男性の場合名前で呼び合うことはほとんどあるまい。奥津・村木氏が述べているように、日本語で成人同士がファストネームで呼ぶのは、いやいやになれなれしい感じや、低俗な感じに響く。日本語では、「親しき中にも礼儀があり」、という倫理意識が強いからであろう。日本語では年齢の差、先輩後輩、ランクの上下などがきわめて重要なものとして意識され、それが互いの呼称を規定しているが、中国語においては上下の差はあることはあるが、日本ほど強く意識されておらず、むしろ同格者の範囲が広いので、社会における人間関係は、日本よりは平等化しているというべきであろうか。

むすび

以上、中国語と日本語における呼称の用法の異同について、「人称代名詞」、「呼びかけ」、「呼び捨て」の三つの面から考察し、分析した。内容的には紙幅が限られているので、一度だけでの考察では徹底的に論じることが難しい。考察の結果を簡単にまとめると、次のようにいえるであろう。

中国語における一人称、つまり自己を指すことばは「我」だけであるのに、日本語では、何種類かの代名詞及び、固有名詞、身分用語、親族用語とその種類は多彩である。同じく第二人称、つまり相手を指すことばも、中国語は「你」、「您」だけであるのに、日本語では第一人称と同じく身分用語や親族用語など対人関係用語の各種のものを併用している。「呼びかけ」は、中日ともに各種のものが用いられている点では共通だと言ってよい。だが、日本語の第一人称、第二人称、「呼びかけ」は多種多彩と言ってよいが、その用法にはきわめて制限が多く、使用の自由度はいたって狭い。どのようにして中国人日本語学習者に理解してもらい、母国語の影響をなくすかについては、これからも更に深く研究する必要がある。

文化的背景からみて言えることは、次のことであろう。呼称の表現において、日本社会で重要なことは、職場においては、相手の年齢ではなく、社会的地位をすみやかに見極め、その人の役職名で対応していかなければならないということである。その意味で、社会的制約がある。一方、中国では、社会地位よりはひとつの大家族の仲間同士の意識が強いことに注目されなければならない。家長（親）が上にいて、ほかは皆家族の一員で、それぞれ家庭内の仕事を分担し、平等に共存していると考えればよい。呼び捨てが多いのもここに原因あるとあってよいだろう。

また呼称の親族用語においては、中国語が日本語よりもはるかに豊富である。これは、中国では家族の意識がまだ強く残っているからであり、親しみのこもる「呼びかけ」をする場合、同じ親族に属していなくても親族名で呼ぶことが多いのは、このことを裏づけているとあってよい。こうした傾向は日本にもあるが、中国と比べるとはるかに少ない。

中日呼称についての研究は、これまで、必ずしも少なくなかったとはいえない。が、これらの研究は、これまでは言語形式にとどまる研究が多く、従って、言語を支えている文化背景にまで立ち入って考えることは、あまり多く行われてはいない。本稿では、いささか大胆な考察・分析のきらいもないではないが、一応現時点で感じたことを整理し、纏めてみた。まだまだ未熟ではあるが、これをもって「むすび」に代えたい。

本論文作成にあたっては、日本語の表現において、横浜商科大学の先生方からいろいろご指導を賜った。深くお礼を申し上げたい。

注：

「～」で表記しているところには姓が入る。

参考文献

- 森岡健二（1973年）「敬語と教育」『敬語講座⑦行動中の敬語』明治書院
- 蘇徳昌（1981年）「日漢敬語的比較与翻訳」『日語学習与研究』総8号
日語学習与研究雑誌社
- 郭俊海（1996年）「日本語と中国語の第三者敬語における『親』・
『疎』の働きの比較対照——日本人と中国人大学生の
言語調査を中心に——『日本語と日本文学』
筑波大学国語国文会編集・発行
- 『日本語ジャーナル』アルク 2000年6号
- 出版筑波大学日本語教育研究会著『日本語表現文型 中級Ⅱ』凡人社
1983年4月
- 奥津敬一郎・村木正武（1974年）「英語の敬語」『世界の敬語 敬語講座
⑧』明治書院
- 赤坂和雄（1997年）「呼称の社会言語学的諸問題について——日本，アメ
リカ、ニュージーランド3国を比較して——」『札幌
大学総合論叢 第3号』